

熊本大学学術リポジトリ

Kumamoto University Repository System

Title	落磐（社会劇一幕）
Author(s)	中村，政雄；ナカムラ，マサオ
Citation	龍南， 1 8 4： 3 8 - 5 9
Issue date	1922-12
Type	Departmental Bulletin Paper
URL	http://hdl.handle.net/2298/8602
Right	

落

磐

(社會劇二幕)

中

村

政

雄

人
物

片山武二

炭坑社員 卅歳

同 承子^{しやう}

その妻 廿七歳

同 友也

その子 四歳

その老父

七十歳

その老母

六十歳

はる

子守娘 十六歳

健二郎

承子の弟 廿三歳

本多

武二の友人 卅二歳

よね

壓死された坑夫の妻 卅歳

その坑夫の老爺

六十歳

よねの娘(十歳)

息子(六歳)

坑夫辰造、外數名の坑夫

武二の老父母は中風の爲、歩行極めて困難である。特に老母は、少々白痴に近くさへなつてゐる。

場所 九州の某炭坑地

時刻 夕方から夜にかけて

景

植込の無い庭に面した室、然し少許の草花や鉢物がある。室には佛壇、床の間等、右手は玄關に通ずる。舞臺左手には、切崩された赤土の土手の斜面が見え、薪にさるべき、古枯木が少し許り積まれてゐる。土手の斜面に突出て、庇が低く下りて炊事場が取付になつてゐる。壁に荒格子の明取りがあつて、小さい土管の煙突が出てゐる。今炊物をしてゐるらしい。斜面の邊に干物竿等があり、二つ三つ干物が取殘されてゐる。炭坑は、土手の向ふ側に當る。

暮開くと、蒸汽機關や、機械の廻轉の音等が快く聞ける。友也と、赤ん坊を背負つた千守娘はるさが蹲んで何かしてゐる。武二の老父は不隨な右手を懷中に入れ、左手で、鉢物を弄り等してゐる。老母は縁に出て煙草を吹かしてゐる。

承子。(臺所から) 姐や! 姐や!

はるは、聞けないか、返事をしない。

承子。(臺所から出てエプロンで手を拭き乍ら、坑木のある邊から鋭く) 姐や!

はる。(驚いて顔を挙げ) はい、

承子。(進み出て) 聞えなかつたの、

はる。(立つて) いいね、聞えませんでした。……何か御用でございますか、奥様

承子。(低い聲で) お前。時々、こつそりとお前の所に來る男は誰だい、一体ありや、

はる。(顔を赤くして俯向く) ……………

承子。知つてる男かい、

はる。はる、

承子。何しに來るんだね、

はる。(益々顔を赤くして俯向く) ……………

承子。云はれない事なの、

はる。(小さい聲で) いいね、

承子。まさか泥棒に來るんぢやあるまいね、

はる。(顔を舉げて) いいね、

承子。なんだか胡亂臭いね。今先きも、じつと宅を覗いてゐたよ。

はる。(それはして) 來てゐましたか?

承子。もう歸つたよ。

はる。(落膽して) 泥捧ぢやございません。

承子。まさか、お前が、泥捧を引込むやうな事はしまいしね、

はる。(反抗的に顔を擧げて見る)

承子。お前の親類かい?

はる。(下を向いて、指が動かし乍ら) いいね、

承子。ぢや何だい?

はる。何でもございません。

承子。(考へて) お友達かい?

はる。(直ぐには返事せず) は、はい

承子。何處の者だい?

はる。納屋な(坑夫社宅の事を稱す)の者でございます、

承子。ぢや、やつぱり炭坑に出るんだね、

はる。はい。

承子。古くからの友達なの?

はる。いいね。お宅に參つてからでございます。

承子。お前のお友達なら善いけれど、何だか物騒だからね。

承子は干物をさりにかゝる

はる。奥様、私がとりませう。

承子。いいのよ。お前、臺所の加勢をしておくれ、

はる。はい（臺所の方にむく）

承子。あの、あんまり馬鹿を眞似をしちやいけないよ。（その後から浴せる）

此頃老父は立つて、縁の煤煙を吹き拂ひ乍ら老母の近くに腰掛ける。友也は祖父の側に附いて、同じく祖父祖母の間に不意に腰掛けやうとする。

老父。（慌てて） あゝこりや、こりや、待て（こ制して、煤煙を吹き拂ふてやる）よし（こ、それから左の手で加勢をして掛けさせる）

承子は、干物の二三を取り込んで、同じく先づ縁を拂つて、干物を置く。

老父。（煙草を吸ひ乍ら） 姐やが、どうかしたのかな、

承子。（干物を疊みつつ） 否ね、別に何でもございませんの、

老父。さうか、それなら善ね、然しあの娘はもう小供ぢやないよ、

承子。（驚いた調子で顔を上げ） ね？

老父。（然し夫には關はずに） 武二は歸りましたかな、

承子。（トントンと敲いて鍔を延べ乍ら） まだでございます。

老父。遅いの、

承子。どうしたのでございませう、

老母。武二は、東京に連れてゆくと云よつたなあ、（とひくくはははと笑ふ）

老父。（笑ひ乍ら） あんたをかい、

老母。（同じく小供の顔を單純な笑ひで） はゝ、

老父。そんな躰で、どうしてゆけるかな、動けもせん癖に、

老母。でも、私や、一遍も行かんもの、此歳になるまで、家より外は一遍も行たこたないもの、

老父。女子がさう、盛りの附いた猫のやうにはうつつき歩いてたまるものかな、家を守るのが女子の道

ぢや、

老母。でも私や行きたいもの、行きたいのならどうしよう、一生に一遍位は、東京見物もしたい、

老父。行きたけりや、獨りで行きや善い、そしたら、汽車にでも轢かれて、新聞にでも載るぢやろ、

老母。女子は損ぢや、男ばかり勝手に遊び歩いて、樂は男がどつてしまふ、

老父。男は遊んどりやせん。働く爲に出歩くのぢや、働くのが人生ぢや、世の中に樂を求めて生きとつ

たら、自殺どころぢや、

老母。常も樂しまうとは云はんもの、一生に一遍位、思ふ儘遊んで見たいといふ位だもの、それさへ出

來んやうぢや、生れて來ても何になつたら、

老父。可哀いさうな事云ひよる。何の爲生れて來たのやら分るもんかい。それがわし達風情に分るやう

なら、阿彌陀様の五劫の難行もありやせん。それよか、お淨土參りでも考へた方がよかないかの、ば

あさん、

老母。私や、まだ死にはない。死ぬのは厭ぢや、

老父。然し、もう追つけ參る時が來とるぞ、今の中に用意しとかんと、遅うなる。斯んな醜い風態で生きとるのは恥ぢや、命を食るのは見つともない事ぢや、

老母。見つとも無うても、なんでも、私や、まだ死にはない、あんだの様に、胃まで悪うなつて、何を食べても土を食ふのと同じ味なこともないもの、

老父。そりや、さうぢや、わしや、生きとるだけが苦しいやうな躰ぢやから、餘計さう思ふのかも知れん。然し、そんな躰で、東京三界まで出歩るかうなで思ふのは、生恥曝しぢや。武二は連れて行きやせん。第一勤のある躰ぢやもの。勤は、どこの勤も昔わしどんが殿様にお仕へしたと同じ氣持で仕ふべきものぢや、勤を疎にするこたでせん。

老母。武二が連れて行かにや、承子さんと行く。なわ、行かうなわ、承子さん。

承子。(干物は既に疊み片付けてしまつて頬笑み乍ら) 今の暮しでは、他所に遊びに行かうの何のといふ段ではございませんの、その日その日の。暮しのお錢に足らない位でございます。

老母。行かれんかなあ、行かれんかなあ、

承子。坑夫などは、社員と云へば貴族か何ぞの様に思つてゐるらしいでございますけれど。内輪は、淺ましい暮でございます。とても、できない事でございますから、唯今ではもう皆なに目を瞑つて、あきらめて居りますの、且那様にも、お氣の毒でございますけれど、只器械になつて載いて、働いて載く許でございます。とても人間らしい生活をしやうなんてことは、望みも致されせん、友也の教

育さへ、できるかどうか心配して居ります、

老父。どうかな、ばあさん。そんな望は、あきらめたが善ね、

老母。でも、私や行きたいも、行きたいもの（終りにひくく笑ひ出す）

老父。武二はまだ歸らんの。

承子。（洗濯物を手にもつて立ち乍ら）ほんとに、どうしたのでございませう。

間、炭坑の巻揚機を動かす蒸氣の音が、ポツポツポツポツポツホホホ、と、さくさく様々に聞は出す。

友也。母ちゃん！まんまい様が出るよ、ほら！

承子。（振返つて）本當に、綺麗だねね。

老父。うん、今日は十五夜ぢや、

承子。（急に氣付いた様に）姐やでもやつて見ませうか、事務所まで、

老父。さうしてごらん、

老父と老母は、危かしい足取りで、次の室に去る。老母の歩み方は、極めて小刻みである。

承子。（少し歩み出乍ら）姐や！姐や！

はる。（臺所から）はい

承子。一寸居らつしやい。

はる、臺所から現はれる

承子。あのね。旦那様の歸りがあんまり遅いから、一寸事務所の邊まで行つて来て下さい。そして、誰

か、社員様に逢つたら、尋ねて見るんですよ、

はる。はい、（行かうとする）

承子。一寸待つて、芳子を取りませう、

赤ん坊を、子守の背中から抱き上げる。はるは臺所さ、土手の間を、奥へ去る。承子は、縁に腰を掛けて、乳を與へる。

承子の弟健二郎、左手から入る、學生らしい風彩をして居る。承子、素早く認めて、友也に囁く。

承子。叔父さんがお出たよ

友也。（大きな聲で）叔父さん！

健二郎。や、友也さんか、（抱き上げて）姉さん、遊びに上りましたよ

承子。居らつしやい。

健二郎。兄さんは？

承子。また歸らないの

健二郎。常も斯んなに遅いんですか？

承子。いゝね、もつと早い

健二郎。居残りでもあるんですか

承子。否ね、そんな事つちやないの、とても

健二郎。（笑談に）死んぢや居ませんか

承子。（冷めた笑を浮べて）まさか。縁起でもない。然し何だか氣懸りなの

健二郎。(赤ん坊を覗いて見て) 芳子さんも大きくなりましたね

承子。(氣乗りの仕ない調子で) さう？

健二郎。(友也を下して) 御義父^{ごとう}さんは？

承子。御室に

健二郎。はるは？

承子。(笑を含んで見上げて) 姐やは居ません

健二郎。何處へ行つたんです

承子。(笑つて) 姐やをどうするの？

健二郎。(どぎまぎして) どうもしませんよ、だつて尋ねたつて好いでせう

承子。彼女^{あね}は此頃美しくなつたんだからね

健二郎。(笑つて) それでいけないと云ふんですか

承子。さうではないけど……

健二郎。然し、こんな笑談も云へるのは姉さん許ですよ、姉さんは分つてますね。感謝しますよ。

承子。斯んな冗談の云へるのが嬉しいの

健二郎。(當惑して) さう云はれると返事ができないけれど……何か慰められる氣がします。僕姉さんの

側に居ると、お母さんの側に居るより、お母さんの側に居る氣がしますよ

承子。妙な事を云ふのね

健次郎。だつて事實ですよ。僕お母さんの側に居ると苦しくなるのです。學校生活をして家を離れてゐた故か、お母さんを慕はしく思ふ情が、母といふ者を、餘りに理想化してしまつたものでせう。心に描いてゐるお母さんと、現實のお母さんが一致しないのです。人間としてのお母さんを認めねばならないのが苦しいのです。随分無理な註文ですけれどね。やつぱり出来ることなら、お母さんは、愛そのものの權化であらせたいた氣がしますよ。姿、形とも。だから畏れ多い事ですけれど、現皇后の御姿等を拜すると、自分のお母さんに逢つたやうな氣がします。その意味でやつぱり姉さんが、お母さんよりも、私の心の母の姿に近いのです。

承子。随分變な氣持ね、

健二郎。(笑ひながら) 或は病氣かも知れませんね

健二郎。變でせう？然し、事實は、事實なんですつまりお母さんの乳房に縋り乍ら眺めた頃の氣持に寫るお母さんに逢ひたいのです。

承子。少し病氣ぢやないの、お前そんな事を云ふやうぢや

健二郎。だが姉さんは、そんな氣がする事はありませんか

承子。私はあるが儘のお母さんより外のお母さんを考へた事はないのよ、でもお母さんは、やつぱりお母さんだね

健二郎。さうですか。やつぱり女は現實主義ですな

承子。お前の様な事を云つたら人は少し氣が狂れてやしないかと思ふだらうよ、

健二郎。さうでせうか(さ後は笑ふ)

小間

承子。お義父さんに挨拶してこなけりや悪いよ、お前。

健二郎。さうですね、僕、お義父さんとの挨拶が嫌ひなんですが

丁度此時、老父襖を明けて入り来る

老父。承子さん、武二はまだ歸りませんか

承子。(振返つて) 未だ歸らないのでございますが、本當に、どうかしちや居ないのでせうか、

健二郎。(進み出て) お義父さん、又上りました。先日はお邪魔を致しまして

老父。(當釋をして) や、健さんですか、居らつしやい、

健二郎。御加減は如何でございますか?

老父。有難うございます、相變らず、これには弱つて居ります。さ、どうぞ、お上り。

健二郎。はい、

健二郎、座敷に上り、承子も上る、最前の干物は、隅の方に置く、友也も、このこゝ母の後ろに附いて上る。

健二郎。友也さんは、大人しいね、

此の時、坑夫二名、左手から慌しく馳け込み来る。

坑夫甲。た、た、大變です! 大變ですよ!

一同驚よて振向く

老父、健二郎。(同時に) 何!

健二郎は直ぐに立上る

坑夫乙。お宅の旦那様がやられたんです!

承子。いつ!(立上つて近寄つて) ど、どうしてやられたんです?

此頃から老母も室に入る

坑夫甲。(急いで) 落磐があつたんです。ほんの今さつき、片山さんの姿は、今日は誰も見受けなかつたと云ひますが、外の社員さんは、もう皆上られた後に、落磐があつて、その中に社員さんが一人居れるのだから、片山さんより外には誰でもある筈がありません。

坑夫乙、誰が誰やら迷茶迷茶になつて、顔では、もう薩張り分らないのですから、服で判断する外無いのです。

坑夫甲。とにかく何方が来て見て下さい。

沈黙の中に一同顔を見合はせる

健二郎。よし、ぢや、僕が行つて見ませう、

坑夫甲。(行き掛け乍ら) 片山さんは、出ちや居られたんでせうなあ、

返事なし、坑夫等及び健二郎走り去る

可なり長い間の極めて深い緊張した沈黙、承子は極度の不安と、極度の期待との面持である。

健二郎急いで入り来る

健二郎。(急いで) やつぱり駄目です。義兄さんです。とても悲惨な死様です。あんな惨たらしい姿を姉

さんに見せたくはありません。まるで人間とは思へないので、岩に敷かれた所は、丁度、薄つぺらな煎餅と同じです。目も、鼻も、口もぐちやぐちやです。只腰から下だけが、敷かれてゐないので、勿論、顔では、誰が誰やら薩張りわからないのです。然し血だらけな服ですが、服で、社員と分るのです。そしてやつぱり義兄さんの仕事服らしいのです。

承子。(震へる聲で) 死んだのは、旦那様ばかりなの？

健二郎。否、外に四五人あるんです。皆裸で、褌一つですからね、坑夫だと直に分るんです。女の坑夫も一人混つて居ました。それと今一人の男どが、不思議に、顔だけをやられて居ないので。女は若い女でした。何しろ、夕方の交代で下ると直べやられたんださうです。義兄さんは、交代が済むまで待つてたものと見えますね。(小間) あ！それから、その一人の死んだ若い方の男の顔を、この、はるが、そりや凄^ひい顔付で見詰めて居ましたよ。色はまっ蒼になつてね、誰か、親類の者でも、あつたんですかな。自殺もしかねない顔付でしたよ。實際、はるは、自殺も仕兼ねない娘ですからね、

間

健二郎。死骸の例には、蛆虫の様に、坑夫の家族が絶つて泣き叫んでゐました。目も當てられないのです。信仰があるものと、無い者は、死に面するとさすがに違ひますね、生者必滅の理が、あれらには分らないのですからね、親内^{ひな}に死なれると、天地が、引つくり返つたやうに轉倒するらしいですね

承子。(急に面を俯せて聲を立てずに泣き出す)

健二郎。(呆然として) 姉さん！姉さん！どうしたんです一体、しつかりしなくちやいけませんよ、

日頃の姉さんにも似合はないちやありませんか。どうしたんです、日頃の信仰は、確りした氣象は。義兄さん是不慮の死ではあつたけれど、大涅槃に入られたんです。醜い、煩惱の涙で、送るべきではないではありませんか、

承子一時に涙線が破裂したやうに涙き崩れる。然し聲は立てない。やがて急に友也が聲を擧げて泣き出す。

健二郎。あゝ、(と兩手を顔に當てて、右玉の方の縁に行つて、ごしりごし掛ける)

此時、ごやごやと騒がしく、左手から本多を先頭に、二人の坑夫が一つの黒いザエルをかけた擔荷を擔ひて入る。擔荷の後ろには、坑夫宇佐吉の妻よね、及びその老婦、娘、息子等がついてゐる。争い、罵りつつ入る。

よね。(擔荷に縋つて) 待つて下さい。待つて下さい。

坑夫辰造。こら、こら、除かんかよ、ねさん、除かんよ、ねさん、

よね。否ね、待つて下さい、待つて下さい。

本多。(怒つて) こら、貴様達や！

此の聲に辟易して手を放した間に、擔荷は正面の座敷まで擔ひ付ける。そして、上に上げやうとする時、また追ひ縋る。

よね。(走り寄つて擔荷を留め) 待つて下さい、待つて下さい、こりや宅の人ぢや、

本多。(素早く室に上つて) こら！除けといふのに、執こい奴ぢや。

よね。お前さんこそ、執こい、何故歸さんのぢや、

本多。(鋭く) 何！

よね。こりや、宅の人ぢや、

本多。馬鹿を云へ、こりや片山君ぢや、

よね。いんにや、宅の人ぢや、宇佐さんぢや、

本多。貴様等、人違ひをしどる。こりや社員さんぢや、

よね。いんにや、宇佐さんに違ひなか、

本多。(大きな聲で) 馬鹿! 滅多な事すると、警察に引かれるぞ!

警察のに恐ろしたものが、よれば手を放して口を噤む

本多。さ。上げてくれ、一寸待て、此儘は上げられない。ま、下に置いてくれ、躰だけ上げやう、(擔荷を下す)

坑夫の老爺。(坑夫を留めて) これ、待つてくれ、辰つあん、嫁もあげん頑張る所ば見つど、何か理があつぢやろ、此處にや、片山さんの親身の方も居らるどぢやけん、見別けて貰うちやぞうぢやろ、

本多。馬鹿な事を云へ、顔も躰も。煎餅のやうになつてゐるのに、何處で見分けるか第一坑夫が、社員の仕事服を着てゐるから?

坑夫の老爺。そりや、さうでございますばつて、

本多。これが、片山君であつてくれない事を實は望むんだ、然し事實は仕方がない、よね。いんにや、こりや宅の人ぢや、宅の亭主に違ひなか、宅の人は未だ歸らんもの

本多。五月蠅い、そんな事が理由になるか、貴様の亭主は女郎買ひにでも行つてゐるのさ、歸れ、歸れ、

よね。いんにや、歸らぬ、歸るものか、

本多。(鋭く) 歸れ！

よね。(同じ調子) 歸らぬ！

本多。(拳をあげて) 何！

よね。一寸だつて動くもんか、

よねの娘。(氣づかつて) かかさん、

坑夫の老爺。よねや、歸らう、わしどんがま違つとるぢやろ、

よね。ま違つちや居らん！父つあん、怯くるこたなか、

健二郎。(側に寄つて) どうしたんです？一体、

本多。こいつ共が、片山君の死体を、自分の亭主のだと思ひ違へて居るんですよ。勿論これの亭主も炭坑に出た儘歸らないさうですか、そりや、彼奴等が、よくやる、自分の嬢の鼻を明かす手段ですからね。然し實は、こいつ等の云ふ事が、嘘にも事實であつて貰ひたいのですよ、そしたら、會社の方にせよ、貴方がた一家にせよ、又我々友人にとつても、是より嬉しい事はないので、喜んで死体は與へるのですが、不幸な事實は如何とも仕難いのです、悲しい事實です、

健二郎。成程。(よねに) 君等には、何か自分の亭主だと云ふ確かな證據でもあるのかね。

よね。宅の人が確かに、坑に下つたのを私や見ましたのです。そして落磐のあつた所が、宅の人が、今

仕事して居た所ですもの。宅の亭主は、淫賣買ひなんかする人ぢやありません、淫賣買ひなんて、あんまりぢや、他の亭主を。

健二郎。そりや、どうでも善い、僕の知つた事つぢやない。然しそれだけぢや、理由にならんぢやないか、

よね。そして、外に死んだ者は皆な、宅の人と一緒に、働いとつた者です。私の亭主ばかり居らずに、社員さんが代りに居るちう筈はありません。社員さんの死んはることありません。社員さんな、坑内あなの事務所に寝てばかり居んはります。

本多。何！生意氣な事を云ふな。

よね。(構はずに) 社員さんな、危か所さんな行きなはりません。行つても稻妻ひかりものの様に歸つて來なはります。本多。餘計な口をきくな、貴様達に何が分る。

健二郎。然し、坑夫が斯んな服を着るかい。

坑夫の妻。お古を貰うとりました。ちつと風邪具合が悪いちうとつたけん。着たまゝ行つたもんでせう

健二郎。(ヴェールからはみ出た青い仕事服を見て) こりや血は着いてるが、餘り古くはないせ、よね。……

健二郎。(擔ひて來た坑夫等に) 君達や、どう思ふ?

坑夫辰造、分りませんな、斯うなると。片山さんぢやろとは思ひますが、

他の坑夫。坑夫は、こげんか服を着ること許されとりません。社員さんと、ま違ふちうて、

よね。(怒つて急に坑夫を突きやり乍ら) 何ちうか、此のつくねん坊! こりや宅の人ぢや、宇佐さんに違やなか
他の坑夫。何するか、此ん畜生!(打ち掛らうとするのを坑夫辰造留める)

よね。諂ふな、諂ふな。坑夫が坑夫に加勢せんちう法があるか、

坑夫辰造。よねさん、落付け、落付け、お前逆上とるぞ、

よね。(他の事には耳を藉さず) 父つあん、何あんな愚圖愚圖しとる、こりや、宇佐さんぢや、あんたの息

子ぢや。早う抱けて持つて行こ (擔荷の間に入り乍ら) あんた前ば、抱けなはれ。(然し老爺は、躊躇して、直

ぐには抱けやうとはしない)

他の坑夫。お前々の亭主、情人もつとるぞ。情人廻りでもしとる

よね。卑怯もん、この。手前が情人狂ひ許りしとる癖に

本多。(苛々して) こら! (よれを睨め着け乍ら) 貴様達や出て失せんか。出ないと敲き出すぞ

よね。宅の人を歸せ! 舊のやうにして歸せ、牛や馬のごとき使ふて、あがりの三八にや打殺して死骸

までやらん、歸せ、歸せ、舊のごとして歸せ (擔荷の柄に凭れて遂に泣き出す) 間

老父。(重い調子で) あーあ、これがあんな方にやれるのだつたらなあ、

承子。私は此の死体を見てゐると、段々厭な心地になつて参ります。厭な心地が、心の全部を占めてし

まひさうです。勿体ないけれど、此れが、夫といふ氣が致しません。此の不氣味な骸に、夫の靈が籠

つてゐたといふ氣がちつとも致しません。

老父。わしも不快ぢや、斯んな醜いものを見てゐるのは。

健二郎。姉さん。これはそんな眼前の感情の問題ではありませんよ、重大な事です。

老父。あーあ、これが眞違ひであつてくれ、

承子。私は此の人達が、無理矢理にでも此の死骸を、ひたたくつて、持つて行つて呉れば、是が夫でなくなるやうな氣が致します。夫は、どこかに生きてゐるが、此の骸^{せう}の爲に封せられて、歸れないで居るやうな氣が致します。

健二郎。義兄さんは死んぢやゐません、確かに生きてゐますよ。然し、それは、靈界の事です。

承子。力つくで奪ひ合つて、あの人達が勝つて持つて行つたら、夫が歸つてくる様な氣が致します。

よね。なら、貰つて行つてよございますか奥さん

本多。(鏡く) いかん！こら！

よね。(悄けて) 父つあん、どうしよう、宇佐さんに違ひなかなあ

よれの二人の子供は、此頃庭の草花を摘んでそつと死骸の枕許に置く、

よね。(子等に) ぬし等の父さんぢや、よう拜れぬよ

子等、蹲んで手を合せる

坑夫の老爺。何か、見別くる法は無かもんでせうか喃

健二郎。それは醫學上から、出来ぬ事はないかも知れぬ、然し、此處の醫者で、できる事がどうか分らない、

よね。(子の合掌する姿を見乍ら) 坑夫ちゆうと、死んでからまで、こげん慘^みむ目に逢はにやならんか、こげ

ん見下げ果てられた目に。何故貧乏するぢやろ、貧乏さへせにやごげんか目に逢ふ事も無かつたろ、働いても、働いても食へん様な貧乏の擧句が、こげんか死目ぢや、宇佐さん、嚙口惜しかる喃、浮ばれん事つぢやろ、残念かる、(地べたに坐りこんで泣く)

間

玄關の開く音、不意に鈴が鳴る。一同その方に注意を向けると同時に
聲。(平常な陽氣な聲で) 今歸つたよ。

武二入る。青い色の、ま新しい仕事服を着てゐる。一同餘りの意外さにぎよつとした態である。小間

本多。(不意に) や! 片山君か、片山君ぢやないか

武二。どうしたんだ、一体こりや、(見廻す)

本多。(武二の手をとつて) よう、無事だつたか。無事だつたか君や

健二郎。義兄さん、無事でしたか、無事でしたか

武二。何です?、一体全体

老父。武二! 善う生きとつた。わしや、う、嬉しいぞ、嬉しいぞ!

老母。生きとつたなあ、生きとつたなあ、(ひさり手に笑ひ崩れる)

武二、猶合點のゆかぬ面持ちで、突立つた儘見廻し、その目が、承子の目に注がれた時

承子。(嬉しさうに、然し落着いて) 御歸んなさいまし。

武二。(承子に向いて) どうしたんだね、私には全く合點が行かない。

よね。(皮肉な調子で) 社員さん等、もう分つたる、そんならこりや貰つて行きます、辰つわん(他の坑夫に)

あんた、御苦勞ばつてん、納屋まで頼みます。

武二。(手を上げて制し) 御待ち! 一寸待つてくれ!

動きかけて、坑夫等留まる

武二。どうしたといふんだ、(死骸を指し) それは何だ。

本多。ありや君だつたのさ、君の身代りだつたのさ、

よね。(反抗的に) こりや私の宅の人ぢや

本多。君が落磐で、やられたといふ事だつたのさ、今日、今さき。それで我々は、その死骸を護つて此處まで來たんだ。一体君は何處へ行つてたんだ。

武二。サポタージュさ、坑のもぐらも時には天日を拜まねば命がもてない。炭の粉ばかり吸つて、生きて居れるか。地上は太陽の恵に輝いてゐるのに。徒らな間に時は過ぎてゆくよ。

よね。もう用事やなかるな

武二。ほんとに濟まなかつた。御氣の毒だ、後で上るよ

よね。來て下さるにや及ばん。來て貰つても座る場所はありやせん。(子等に) さあ、吾がどま早う先きに行け!

坑夫の老爺。お邪魔になりました、

坑夫二人、再び擔荷を抱けて左手に靜かに去る。老爺は首うな垂れて、よれ、嘔泣き乍ら従ふ。武二等は、無言の儘見送る。
老母獨り聽てひくく長く笑ひ出す。 靜かに幕。(一九二二、一一)